

B-35) Congenital brain tumor の1治験例

嶋村 則人・関谷 徹治
浅野研一郎・田中 雅彦 (弘前大学)
鈴木 重晴 (脳神経外科)

患児は在胎40週2日で吸引分娩にて出生。Apgar 8/9点、頭囲 34.0 cm、体重 3100 g であった。しかし、生後1日目より啼泣少なく、黄疸、発熱、大泉門膨隆が認められ、生後4日目に Apgar 2点となった。頭部 CT, MRI にて左大脳腫瘍 (48×40×48 mm) および腫瘍内出血を認め、当科紹介となった。生後10日目で頭囲 35.3 cm、体重 2916 g であり、体力の回復を待って生後22日目に脳腫瘍全摘出術施行した。H-E 染色で astrocytoma grade 3 と診断され、VEP 療法を追加した。その後、外水頭症を併発し術後2ヶ月目に S-P shunt を施行。術後4ヶ月の現在、再発なく麻痺も認めず寛解状態を保っている。また、免疫組織学的検索にて Neuroblastoma と思われる所見も認めており、更なる組織学的検索を行っている。

B-36) Hemangioblastoma 診断における 201-thallium SPECT の有用性

近藤 健男・隈部 俊宏
城倉 英史・池田 秀敏 (東北大学)
白根 礼造・吉本 高志 (脳神経外科)

Hemangioblastoma (HB) に 201-thallium (201 Tl) SPECT を施行し、HB の鑑別診断における有用性を検討した。＜対象および方法＞5例の後頭蓋窩 HB と4例の HB 以外の強い造影効果を有する後頭蓋窩腫瘍 (control) を比較検討した。201 Tl を静注し、15分後 (early image) と3時間後 (delayed image) に撮像を行った。腫瘍部の 201 Tl の取り込みを正常部位との比で換算し、Tl index, early image (Tl_E), delayed image (Tl_D) とした。また retention index (REI) を計算し、比較検討を行った。REI = (Tl_E - Tl_D) / Tl_E。＜結果＞Tl_E は HB で 2.75 ± 0.63, control で 3.94 ± 1.93 (mean ± SD) と両群間に有意な差を認めなかった。Tl_D は HB で 1.62 ± 0.43, control で 3.09 ± 1.37 と HB において低い傾向であったが、有意な差を認めなかった。REI は HB で 0.41 ± 0.08, control で 0.20 ± 0.07 と HB において統計学的に有意に高値であった (p < 0.01)。＜結語＞HB においては、201 Tl は early image で中等度の取り込みを認めるが、早期に腫瘍から wash out され、

delayed image においてはほとんど取り込みを認めなかった。201 Tl SPECT による REI の算出が、HB を他の造影効果を有する腫瘍との鑑別に有用であった。

B-37) 胚芽腫にたいする ICE 療法の効果

川上 圭太・嘉山 孝正
櫻田 香・斎野 真 (山形大学)
斎藤伸二郎 (脳神経外科)

胚芽腫に対する Isofamide, CDDP, Etoposide 併用による化学療法「ICE 療法」の効果について報告する。(対象/方法) 過去2年間に当科で経験した、生検により組織の確定した胚芽腫2例と原発巣の組織が確定している播種例3例に対して行った ICE 療法の効果と副作用に関して検討した。薬剤投与量は、原則として松谷らの厚生省班会議のプロトコールに準じた。放射線療法に関しても同様である。(結果) 5症例とも ICE 療法開始後7-10日の画像評価で、すでに著明な腫瘍縮小効果を認めた。さらに、3サイクル終了時には4例で CR を得た。脊髄播種を呈した1例は放射線療法を追加したが PR であった。また、この症例は ICE 療法3サイクルと4サイクルの間の4ヶ月間に更に第3脳室底への播種を呈した。副作用に関しては、全例で骨髄抑制が生じたが、G-CSF 等の投与で全例回復した。出血性膀胱炎は認めていない。(結語) ICE 療法は胚芽腫に対して極めて有効だが、一部の ICE 抵抗性の胚芽腫の治療が今後の課題と考えられる。

B-38) 髄芽腫に対する化学放射線療法を用いた集学的治療

池田 潤・浅岡 克行
石井 伸明・澤村 豊 (北海道大学)
阿部 弘 (脳神経外科)

髄芽腫治療の予後改善を目的として、1991年より prospective study として行っている、ICE (IFO/CDDP/VP-16) 化学療法と放射線療法併用プロトコールの治療成績を報告する。対象は、過去8年間に経験した髄芽腫16例で、年齢は、8ヶ月から12歳 (平均5.6歳) である。診断後早期に全摘出を目指して手術し、術後早期より ICE 療法を開始し、4週間隔で8回行うことを原則とした。2.5歳未満の症例では化学療法を先行し、2.5歳となつてから照射を行い、2.5歳以上では、全脳脊髄照射を化学療法に平行して行った。初期効果判定時の

奏効率は88%であった。最終追跡時点で(平均追跡期間34ヶ月)での生存率は、69%であった。また、生存例のQOLはいずれも良好であった。死亡例は、治療が奏効しなかった2例と再発の3例であった。本プロトコールは、髄芽腫に対して有効である。特に、中枢神経系への放射線照射が禁忌である乳幼児に対する補助療法として期待し得るものである。

B-39) 中枢神経系悪性リンパ腫の治療成績と問題点

片倉 隆一・鈴木 洋一 (宮城県立がんセンター 脳神経外科)
 松本 恒 (同 放射線科)
 吉本 高志 (東北大学 脳神経外科)

【目的】我々は中枢神経系悪性リンパ腫に対し、定位的生検後化学療法としての ACNU 3-Vessels 動注療法と放射線療法の併用療法を初期治療として行ってきた。今回は、本療法を行う上で問題と思われた点について報告する。【対象, 方法】対象は、過去4年間に本療法を行った Bcell lymphoma 17例である(平均年齢57.2歳)。ACNU を両側内頸動脈(C2)及び椎骨動脈100~150 mg/m²投与後、放射線療法として全脳30~40 Gy, 局所10~20 Gy 行うプロトコールとした。ステロイドホルモンは、治療初期一時的に使用した。【結果】本療法の MRI 上の効果は、CR 15例, PR 2例で有効率は100%である。しかし、4~46mの追跡調査では既に6例で再発(1~16m), 4例が死亡(6m, 13m, 18m, 28m)している。MRI 上の再発部位は、局所再発2例, 遠隔再発4例で、早期再発例では、40~50 Gy の照射野から再発していた。【結語】本療法後の再発例の検討と、他臓器の悪性リンパ腫との比較から、本疾患の病態上の問題点を考察する。

B-40) 脳神経外科患者における肺塞栓症の検討

佐藤 光夫・佐藤 拓
 石川 敏仁・紺野 豊 (福島県立医科大学) 脳神経外科
 佐々木達也・児玉南海雄

【目的】脳外科周術期合併症のひとつである肺塞栓症(pulmonary thromboembolism, 以下 PTE)について報告する。【対象と方法】PTE 15例を対象とした。年齢は46~77歳(平均63歳)で男性6例, 女性9例である。基礎疾患, 診断までの経過, 治療と転帰について検

討した。【結果】1) AN, 脳腫瘍, ICH の術後が各々4例, dural AVF の塞栓術後2例, AVM の術後1例である。2) 下肢の腫脹を伴う deep vein thrombosis (以下 DVT) が術後10~21日目に出現した6例では肺血流 scintigram などで PTE と早期診断し得た。一方, 6~85日目に突然の呼吸症状で発症した9例は、肺動脈撮影や剖検で PTE と診断した。このうち5例は片麻痺などのため14~120日間 bed rest の状態にあった。3) DVT と診断した6例では患肢のバンデージ, 低分子ヘパリンの投与, 下大静脈へのフィルター挿入により DVT と PTE は改善した。突然発症した9例中6例は死亡したが, 3例は低分子ヘパリンなどの投与により回復した。【結語】脳外科周術期において、突然発症型の PTE の予後は不良であった。Bed rest や片麻痺を有する患者では DVT や PTE が潜在している可能性を念頭に置き、早期診断, 治療にあたるのが重要である。

B-41) 中頭蓋窩に発生した Capillary hemangioma の一例

渡辺美喜雄・箱崎 誠司 (盛岡赤十字病院) 脳神経外科
 久保 直彦

症例は8歳, 男子。持続する頭痛を主訴に来院。単純 CT にて左側頭葉に広汎な低吸収域を認め、増強 CT にて中頭蓋底に接した直径約2 cm の境界明瞭な環状造影される mass を認めた。MRI では、T1でmixed, T2で high intensity を呈しており、CT と同様な造影効果を認めた。脳血管撮影では、anterior temporal artery より造影される腫瘍血管を認めた。subtemporal approach にて腫瘍摘出術を施行した。腫瘍は硬膜に付着しており、脳実質との境界は明瞭であった。付着部の硬膜を含め肉眼的に全摘した。術後、患者の症状は消失し、神経脱落症状なく退院した。病理組織診断は capillary hemangioma であった。本腫瘍の中枢神経系での発生は稀であり、文献的考察を加え、報告する。